

乞食

水野 仙子

源吉と由に清吾、丁度三つ違ひ位に出来た好い按排な揃つた兄弟で、しかも三人とも乞食である。もとから乞食の種で乞食の腹に乞食と生れたのではない。明治三十八年の不作は——新聞では其頃東北の飢饉と云つた——立派な、傷のない三人の男の子を乞食にしたのである。飢饉といつても商家で形造つた一つの町といふものゝ上から見渡したところでは、さして別段な變りも認められない。たゞ内證にはいつて見ると、それ何處でも一般に御飯には糧かてが交つた。學校へ行く子供達がお晝のお握飯に麥が交つても、自分一人ぢやないから格別恥かしいとも思はない。却つて眞白く綺麗なのを極り悪るがつた。南京米は馬鹿に色が白くて粒が大きいからである。殖えるのに堪へられなくなつて、家内の多い家ではこつそり此南京米を混ぜて使つたものだが、内證の方針は意外な方面に反響を呈して、菓子屋は飢饉年が豊年だといふことを或人が發見して言つた。成る程さう聞いて見ればこれはさうかも知れない。手當が幾分か落ちて居るから、一寸あの大福が喰べたいな位の腹も空くだらう。今川焼の一錢二錢をどうかする位の働きは何家の小僧にだつて出来る。古い

のは古いので賄の不平を一寸自轉車を横付けにして、カステラか羊羹かの少し大きいこともやり兼ねない。袋や竹の皮は倉の中の仕事で、ひつくるまで隣家の庭にぼんとやればなんの事はない。そこで菓子屋が繁盛は事實として置いて、乞食の殖えたのも争はれない現象だ。そろ／＼穴のあいた銭が拂底の折から、さう／＼五厘玉を氣前よく投げてやる譯にも行かず、出ないよと脹れて見せても當節の乞食はなか／＼物堅い。終には小僧と乞食の意地くらべが始まるやら、かと思ふと黒い眼鏡をかけて兵兒帶を廣く巻きつけた女などが、月琴を掻き鳴らして尺八の男と兩側を手分けして廻つて来る。

源吉と由と清吾の三人は、其中に甚だしく異色があつた。何處から來たともわからないが、其言葉で見ると此町の在方らしい。町のうちの者ならまさか男の子をむぎ／＼と乞食にしなくとも、小僧になり何になり使ひ道もあるのだが、何處からか流れて來たものゝ子がつまらない田舎に取り残されたのであらう。村に生えぬきの者なら、いくら飢饉だとてもやはり乞食にはすまい。と思ふのは併し町の者の目から見たことで、其頃常舞臺を借りて催された義捐救濟の幻燈で見た實況には、菓の餅を搗いて食べたといふ話もあつた位だから、三人の子供が町を指して出て來たのも怪しむに足らなかつたかも知れない。

何しろ三人がぞろ／＼と揃つて門に立つのが著しく人の目を引いた。外の乞食の子のやうに、上の空で何卒お助けをと手をつくのではなし首を下げるのではなし、いきなり人の店先に立つて、

「飯まんくんちやアやい」と至極横柄なもの。

「出ないよ、今日はなんにもないよ」と言つても、

「飯くんちやアやい」を幾度でも繰り返す。それが執念く立つて居る。光りの弱いそれでて何處やら鋭い眼そしてまあ其顔色の青さ！肌理きめの細からしいだけに其土氣色が不氣味で、一目見て榮養不十分といふことがわかる。痩せてる故か源吉が殊にそれが目立つ。外の二人は色こそ劣らず悪るいが、それでも少しは脹れて居たやうだ。

「そら！」と小錢を投げてやつても、それには一寸目をくれたまゝ、

「腹が空つてるんだから飯くんちやアやい」とばかりいふ。慾のないのが少しは可憐らしくもなつて、豆腐きくらげ糟炒ず炒りとか握飯とかを袋の中に入れてやると、禮も言はずにとつと出て行つて了ふ。由と清吾が後から續く。この二人はたゞ従いて歩くだけで、強請るのは源吉一人に委して置く。

人情といふものは不思議なもので、かうして三人が並んで歩いてゝも、一番小さな清吾の袋がいつも一等重くなつた。それを普請場の板圍ひの下などで、轉がした石に腰をかけて、分け合つて喰べてるところはよく見掛けたが、さて夜は何處に如何して過すのかさつぱりわからない。尤もそれを調べて見るやうな好事者

も居なかつた。

三人は生地のままの乞食である。町端れの木賃宿で親達の相續が出来て、明日は躰の老爺の孫に見せて使はれるといふやうな、乞食の店飾りにも馴れて居ないから、相變らず三人がぞろ／＼と揃つて飯を貰つて歩くだけでも月日といふものは實際馬鹿には出来ないものだ。知らず／＼別段な指圖も爲ずにいろ／＼なことを教へて行く。

まづ夏が來た。毎日物種屋の角の脇に出て居る屋臺店に、玉蜀黍が青い皮を剥がれて、火の上に翳されて、すつとん／＼と飛ぶやうな身の匆ねる音の間々には、汚い婆様の煽ぐ團扇の大花がバチ／＼と散つて消える。空腹が其匂ひに足を止められて、或日三人は暫く其前に立つて見て居た。鼻の頭に油汗を浮かした子供が來て、一錢玉を投げ出して其一本を持つて行つた。すると源吉はそろ／＼と袋から種々の集めたのを出して婆様の前に置いた。目の縁のくしやく／＼とした婆様は一頻り忙しく瞬きをして、焼けたばかりの可なり大きいのを取つて源吉に渡した。立所に三人はそれを三つに折つて奪ひ合ふ様にてんでにそれを持つた。さア味をしめた。饅えた飯やお焦げのお握りなどを頂かせられるよりは、どんなに錢の方が有難いか知れない。

「飯くんちやアやい」が「一文くれてくんちやアやい」になつた。それでも乞食としては此言葉は未だなつて居ない。「どうぞ一文頂かして……………」はこれは乞食のおきまり文句ではないか。彼等は田舎言葉を丸出しに

してるだけ素人であった。

三人はいつの間にか別々に歩くことを覺えた。由が廻る。其後を源吉が貰つて歩く。また暫くすると清吾が袋を下げて門に立つ。人々は、はあゝ先生達考へたなと思つたばかりで其手には乗らなかつた。併し時々は忘れたり煩さかつたりしてつひそら！と投げてやつてしまふ。

町と町の角で二人がぼつたり會つたりする。

「お前どの位になつた」

「ほうら、一錢玉があるぞ」など、袋を振つて見せて、「横町の酒屋に葬式ちやちやんぼがあるぞ」など、言つて過ぎる。

小さな清吾が廻るのには大抵徒勞がなかつた。源吾は自分がひどくあぶれた日、あんまり忌々しくなつて清吾を張り飛ばして泣かしたことがある。

【入力者注】

底本と行を合せるために、句読点のサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を加えました（数字は頁行）。

- 48-10 子僧 ↓ 小僧
48-24 飯んくちやヤやい ↓ 飯くんちやアやい
49-3 普新場 ↓ 普請場
49-22 忘れたり煩さかつたして ↓ 忘れたり煩さかつたりして

底本：「創作」一巻五号 47-49頁

明治四十三（1910）年七月

テキスト入力：小林 徹

公開：令和七年七月十三日

リンク：[水野仙子作品年譜](#)

【謝辞】 本作品の公開にあたって、不明だった掲載誌を発見してご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。